

いちご

—— 発病・加害時期
 === 発病・加害最盛期

作型・病虫害名		月											
		1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12
トンネル早熟				トンネル 〇--〇									
						収穫						▲	定植
灰色かび病	うどんこ病												
萎黄病													
ハダニ													
アブラムシ													
アザミウマ													
コガネムシ類	幼虫												
ハスモンヨトウ													
センチュウ													
半株冷促成													
												▲▲	▲
												○××	▲
苗取り・冷蔵													
灰色かび病	うどんこ病												
萎黄病													
炭疽													
ハダニ													
アブラムシ													
アザミウマ													
ハスモンヨトウ													
無加温電照促成													

ミツバチによる授粉を行う際、農薬の使用によってハチの活動が著しく低下したり、死亡したりすることがある。「XVII参考資料 4ミツバチ・マルハナバチ・天敵に対する農薬の影響」やメーカー資料を確認して農薬を使用する。

注1：同じ農薬名でも、メーカーにより登録内容が異なる場合があるので、使用時には登録を確認してください。
 注2：異なる農薬名でも、同一成分を含む場合があるので、成分の総使用回数はラベルで確かめて使用してください。

灰色かび病

留意事項

- 1 多湿条件で発生しやすい。
- 2 薬剤耐性菌が出現しやすいので、同一系統薬剤の連用を避け、ローテーション散布を行う。QoI剤（[11](#)）、SDHI剤（[7](#)）は、耐性菌が出現しやすいので、1作1回程度の使用に努める。
- 3 ボトキラー水和剤は気温10℃以上で使用する。
- 4 ボトキラー水和剤は拮抗微生物を成分とする薬剤で、他剤との混用には注意が必要である。
- 5 ボトキラー水和剤は、暖房機ダクトが設置されているハウスでは、ダクト内投入による処理法も有効である。（Ⅻ省力安全防除 3ダクト内投入 参照）
- 3 アミスター20フロアブルは、薬害の恐れがあるため、浸透性を高める展着剤は加用しない。

防除方法

- 1 日中の換気を十分に行う。
- 2 排水を良くする。
- 3 下葉の摘葉を励行し、株元が過湿にならないようにする。
- 4 かん水量が過剰にならないように調節する。
- 5 窒素過多、晩期の追肥を避ける。
- 6 被害葉・被害果や老化葉は早めに除去し、ほ場外に持ち出し処分する。
- 7 発生が見込まれる時期に下記の薬剤を予防的に散布する。
 - ・ [フルピカフロアブル](#) [9](#) 【2000～3000倍 前日／3回】
 - ・ [ボトキラー水和剤](#) [BM2](#) 【野菜類 1000倍 発病前～発病初期／－】
 - ・ [セイビアーフロアブル20](#) [12](#) 【1000～1500倍 前日／3回】
- 8 発生を認めたら下記の薬剤を散布する。
 - ・ [ロブラール水和剤](#) [2](#) 【1500倍 前日／4回】
 - ・ [アミスター20フロアブル](#) [11](#)
 - 【1500倍 親株育成期／3回】
 - 【1500倍 前日／苗床4回、本ほ3回】
 - ・ [ファンタジスタ顆粒水和剤](#) [11](#) 【2000～3000倍 前日／3回】
 - ・ [オルフィンフロアブル](#) [7](#) 【2000～3000倍 前日／1回】
- 9 ハウス内では、くん煙剤も有効である。（Ⅻ省力安全防除 1くん煙 参照）

うどんこ病

留意事項

- 1 薬剤耐性菌が出現しやすいので、同一系統薬剤の連用を避け、ローテーション散布を行う。QoI剤（[11](#)）、SDHI剤（[7](#)）は、耐性菌が出現しやすいので、1作1回程度

注1：同じ農薬名でも、メーカーにより登録内容が異なる場合があるので、使用時には登録を確認してください。

注2：異なる農薬名でも、同一成分を含む場合があるので、成分の総使用回数はラベルで確かめて使用してください。

の使用に努める。

- 2 ポトキラー水和剤は気温10℃以上で使用する。
- 3 トリフミン水和剤とパンチョTF顆粒水和剤の一成分トリフルミゾールの総使用回数は5回以内なので注意する。
- 4 フルピカフロアブルとショウチノスケフロアブルの一成分メパニピリムの総使用回数は、3回以内なので注意する。

防除方法

- 1 前作のり病株を親株として使用しない。
- 2 育苗期の防除を徹底する。
- 3 被害葉・被害果は早めに除去し、ほ場外に持ち出し処分する。
- 4 窒素過多を避ける。
- 5 発生が見込まれる時期に下記の薬剤を予防的に散布する。
 - ・ [ベルコート水和剤](#) M7
 - 【4000倍 前日（生育期）／5回】
 - 【1000倍 育苗期（定植前）／5回】
 - ・ [フルピカフロアブル](#) 9 【2000～3000倍 前日／3回】
 - ・ [ポトキラー水和剤](#) BM2 【野菜類 1000倍 発病前～発病初期／－】
 - ・ [イオウフロアブル](#) M2
 - 【500～1000倍 親株床初期／－】
 - 【2000倍 発病前～発病初期／－】
- 5 発生を認めたら下記の薬剤を散布する。葉裏への散布を丁寧に行う。
 - ・ [トリフミン水和剤](#) 3 【3000～5000倍 前日／5回】
 - ・ [パンチョTF顆粒水和剤](#) 3 U6 【2000倍 前日／2回】
 - ・ [ファンベル顆粒水和剤](#) M7 11 【1000倍 前日／3回】
 - ・ [アフェットフロアブル](#) 7 【2000倍 前日／3回】
 - ・ [ショウチノスケフロアブル](#) 9 U13 【2000倍 前日／2回】
 - ・ [プロパティフロアブル](#) 50 【3000～4000倍 前日／3回】

萎黄病

留意事項

- 1 6～9月の高温時に発病が多い。
- 2 親株からランナーへも伝染する。
- 3 宝交早生は本病に弱い。
- 4 いちごのみに感染し、トマト、きゅうりなど他作物は侵さない。

防除方法

- 1 健全な親株から採苗する。

注1：同じ農薬名でも、メーカーにより登録内容が異なる場合があるので、使用時には登録を確認してください。

注2：異なる農薬名でも、同一成分を含む場合があるので、成分の総使用回数はラベルで確かめて使用してください。

- 2 無病地で育苗する。
 - 3 無仮植育苗を行う。
 - 4 有機物資材の施用により、土づくりを行う。
 - 5 被害株は早めに除去し、ほ場外に持ち出し処分する。
 - 6 本ぽを土壤消毒する。(XⅢ土壤消毒2(4) 参照)
- ・ [バスアミド微粒剤](#)、[ガスタード微粒剤](#) 劇 ☐
- 【20～30kg／10a 仮植または定植21日前／1回】

根腐病

留意事項

- 1 露地、トンネル栽培で発生が多い。
- 2 地温25℃以上では発病しない。

防除方法

- 1 低湿地では高うねにし、排水を良くする。
- 2 ポリフィルムなどでマルチングを行い地温の上昇を促す。
- 3 被害株を早めに除去し、ほ場外へ持ち出し処分する。
- 4 連作を避ける。
- 5 健全な苗を選ぶ。

炭疽病 (たんそびょう)

留意事項

- 1 品種間で発病に差があり、女峰、とよのか、章姫、さちのか、とちおとめ等は、本病に弱い。
- 2 高温多湿で発生が多い。
- 3 アミスター20フロアブルは、薬害の恐れがあるため、浸透性を高める展着剤は加用しない。
- 4 ジマンダイセン水和剤・ペンコゼブ水和剤はかぶれに注意する。
- 5 QoI剤 (☐1☐) は、耐性菌が出現しやすいので、1作1回程度の使用に努める。

防除方法

- 1 親株は、無病苗を用いる。
- 2 排水を良くする。
- 3 苗床では、土壌のはね上がりを防止するため、雨よけを行う。
- 4 苗床のかん水は、チューブかん水(点滴)か、できれば底面給水をする。
- 5 窒素質肥料の過多を避ける。
- 6 苗床での防除を徹底し、本ぽへの持ち込みを防ぐ。
- 7 本ぽを土壤消毒する。(XⅢ土壤消毒2(4) 参照)

注1：同じ農薬名でも、メーカーにより登録内容が異なる場合があるので、使用時には登録を確認してください。

注2：異なる農薬名でも、同一成分を含む場合があるので、成分の総使用回数はラベルで確かめて使用してください。

- ・ [バスアミド微粒剤](#)、[ガスタード微粒剤](#) 劇 ☐
【20～30kg／10a 仮植または定植21日前／1回】
- 8 発生が見込まれる時期に下記の薬剤を予防的に散布する。
 - ・ [ベルコートフロアブル](#) M7
【1000倍 育苗期（定植前）／5回】
【2000倍 前日（生育期）／5回】
 - ・ [ジマンダイセン水和剤](#)、[ペンコゼブ水和剤](#) M3
【600倍 仮植栽培期（76日前）／6回】
 - ・ [セイビアーフロアブル20](#) 12 【1000倍 前日／3回】
 - ・ [コサイド3000](#) M1 【1000倍 —／—】
- 9 発生を認めたら下記の薬剤を散布する。
 - ・ [アミスター20フロアブル](#) 11
【2000倍 親株育成期／3回】
【2000倍 前日／苗床4回、本ぼ3回】
 - ・ [ゲッター水和剤](#) 1 10 【1000倍 21日／3回】
 - ・ [ファンタジスタ顆粒水和剤](#) 11 【2000倍 前日／3回】

ハダニ類

留意事項

- 1 薬剤抵抗性が生じやすいので、同一系統薬剤の連用を避け、ローテーション散布を行う。

防除方法

- 1 育苗時の防除を徹底する。
- 2 ほ場内や周辺の除草を行う。
- 3 ハダニ類の発生初期にミヤコカブリダニ（スパイカルEX）または、チリカブリダニ（スパイデックス等）を放飼する。
 - ・ [スパイカルEX](#) ☐（生）
【野菜類 100～1250ml／10a（約2000～25000頭） 発生初期／—】
 - ・ [スパイデックス](#) ☐（生）
【野菜類（施設栽培） 100～300ml／10a（約2000～6000頭） 発生初期／—】
- 4 発生を認めたら下記の薬剤を散布する。
 - ・ [カネマイトフロアブル](#) 20B 【1000～1500倍 前日／1回】
 - ・ [マイトコーネフロアブル](#) 20D 【1000倍 前日／2回】
 - ・ [スターマイトフロアブル](#) 25A 【2000倍 前日／2回】
 - ・ [コロマイト水和剤](#) 6 【2000倍 前日／2回】
 - ・ [ダニコングフロアブル](#) 25B 【3000倍 前日／1回】
 - ・ [ダニオーテフロアブル](#) 33 【2000倍 前日／2回】

注1：同じ農薬名でも、メーカーにより登録内容が異なる場合があるので、使用時には登録を確認してください。

注2：異なる農薬名でも、同一成分を含む場合があるので、成分の総使用回数はラベルで確かめて使用してください。

- ・ [エコピタ液剤](#) — 【100倍 前日／—】
- 5 ハウス内では、くん煙剤も有効である。(Ⅷ省力安全防除 参照)

アブラムシ類

防除方法

- 1 ほ場内や周辺の除草を行う。
- 2 下記の薬剤を施用する。
 - ・ [ダントツ粒剤](#) 4 A 【1g／株 植穴処理土壌混和 定植時／1回】
 - ・ [スタークル粒剤](#)、[アルバリン粒剤](#) 4 A
 - 【ワタアブラムシ 0.5～1g／株 植穴土壌混和 定植時／1回】
- 3 発生を認めたら下記の薬剤を散布する。
 - ・ [モスピラン顆粒水溶剤](#) 劇 4 A 【2000～4000倍 前日／2回】
 - ・ [コルト顆粒水和剤](#) 9 B 【3000～4000倍 前日／3回】
 - ・ [ウララDF](#) 2 9 【2000～4000倍 前日／2回】
 - ・ [モベントフロアブル](#) 2 3 【2000倍 前日／3回】
 - ・ [アディオン乳剤](#) 3 A 【3000倍 前日／5回】
- 4 ハウス内では、くん煙剤も有効である。(Ⅷ省力安全防除 参照)

アザミウマ類

留意事項

- 1 露地でも越冬が可能である。
- 2 成虫は花によく集まる習性があり、被害を受けた果実は褐変硬化する。
- 3 薬剤抵抗性が生じやすいので、同一系統薬剤の連用を避け、ローテーション散布を行う。

防除方法

- 1 寒冷しゃや防虫ネット（目合0.8mm以下の赤色）を被覆し、成虫の飛来を防ぐ。
- 2 ビニール等でマルチングし、土中で蛹化するのを防ぐ。
- 3 ハウス内や周辺の除草を行う。
- 4 施設では、夏期の栽培終了後、残さを持ち出す前に7～10日間密閉して残さに残る虫を殺す。
- 5 栽培終了後に2～3日水を張り、土中の蛹を殺す。
- 6 発生を認めたら下記の薬剤を散布する。
 - ・ [ベネビア0D](#) 2 8 【2000倍 前日／3回】
 - ・ [ディアナSC](#) 5 【2500～5000倍 前日／2回】
 - ・ [カスケード乳剤](#) 1 5 【4000倍 前日／3回】
 - ・ [ファインセーブフロアブル](#) 劇 3 4 【1000～2000倍 前日／3回】
 - ・ [グレーシア乳剤](#) 3 0 【2000倍 前日／2回】

注1：同じ農薬名でも、メーカーにより登録内容が異なる場合があるので、使用時には登録を確認してください。

注2：異なる農薬名でも、同一成分を含む場合があるので、成分の総使用回数はラベルで確かめて使用してください。

コガネムシ類幼虫

留意事項

- 1 ダイアジノン粒剤5の成分ダイアジノンの総使用回数は2回以内。

防除方法

- 1 未熟な有機物の施用を避ける。
- 2 発生が少ないほ場では被害株付近を探し、捕殺に努める。
- 3 発生が多い所では下記の薬剤を施用する。
 - ・ [ダイアジノン粒剤5](#) 1 B
 - 【4～6kg/10a 土壌混和 植付時（仮植床）/1回】
 - 【4～6kg/10a 土壌混和 定植時（本ぼ）/1回】
 - ・ [モスピラン粒剤](#) 4 A 【1g/株 植穴土壌混和 定植時/1回】
 - ・ [フォース粒剤 劇](#) 3 A 【6kg/10a 全面土壌混和 植付時（仮植床）/1回】

ハスモンヨトウ

留意事項

- 1 薬剤抵抗性が生じやすいので、同一系統薬剤の連用を避け、ローテーション散布を行う。

防除方法

- 1 施設では、開口部に寒冷しゃや防虫ネット（目合い4mm以下）を張って、成虫の侵入を防ぐ。
- 2 ふ化直後～若齢幼虫時には集団で生活しているので、被害葉ごと除去する。
- 3 ほ場内や周辺の除草を行う。
- 4 発生を認めたら下記の薬剤を若齢幼虫期に散布する。
 - ・ [ベネビア0D](#) 2 8 【2000倍～4000倍 前日/3回】
 - ・ [カスケード乳剤](#) 1 5 【4000倍 前日/3回】
 - ・ [アファーム乳剤](#) 6 【2000倍 前日/2回】
 - ・ [ディアナSC](#) 5 【2500～5000倍 前日/2回】
 - ・ [プレオフロアブル](#) UN 【1000倍 前日/4回】
 - ・ [プレバソンフロアブル5](#) 2 8 【2000倍 前日/2回】

ナメクジ類

留意事項

- 1 湿りやすいほ場で発生が多く見られる。

防除方法

- 1 発生時に下記の薬剤をナメクジ類の発生あるいは加害を受けた場所または、株元に配置する。

注1：同じ農薬名でも、メーカーにより登録内容が異なる場合があるので、使用時には登録を確認してください。

注2：異なる農薬名でも、同一成分を含む場合があるので、成分の総使用回数はラベルで確かめて使用してください。

・ [スラゴ](#) —

【ナメクジ類、カタツムリ類、アフリカマイマイ、ヒメリンゴマイマイが加害する
農作物等 温室、ハウス、ほ場、花壇 1~5g/m² 発生時/—】

・ [ナメクリン3](#) — 【3kg/10a 株元散布 前日/2回】

センチュウ類

防除方法

1 定植前に下記の薬剤を施用する。

・ [ネマトリンエース粒剤](#) 1 B 【ネグサレセンチュウ 20~25kg/10a 定植前/1回】

クロバネキノコバエ類

留意事項

- 1 国内ではチバクロバネキノコバエとチビクロバネキノコバエの発生が確認されている。
- 2 寄主範囲は広く、きゅうり、メロン、ねぎ、ゆり、さといも、しょうが、トルコギキョウ、りんどうなどでも被害が確認されている。
- 3 施設栽培ハウスでは周年発生する。
- 4 ベストガード粒剤、ベストガード水溶剤の成分ニテンピラムを含む農薬の総使用回数は4回以内（但し、定植時の土壌混和は1回以内、株元散布及び散布は合計3回以内）。

防除方法

- 1 未熟な堆肥は成虫を誘引するので、完熟堆肥を施用する。また、有機物を含む資材（有機質肥料等）を施用する場合は、十分に土壌混和する。
 - 2 ハウス開口部に寒冷紗や防虫ネット（目合い1mm以下）を張り、成虫の侵入を防ぐ。
 - 3 ほ場内や周辺の除草を徹底する。
 - 4 摘除した茎葉や古株などの残さは放置せず、ほ場外に持ち出し適切に処分する。
 - 5 株元が過湿にならないよう、水管理を適切に行うとともに、古葉かきを早めに行う。
 - 6 株上に黄色粘着板を設置する。
 - 7 発生を認めたら下記の薬剤を散布する。その際は、幼虫が生息する株元にも十分に薬液がかかるよう株全体に散布する。
- ・ [ベストガード粒剤](#) 4 A 【チバクロバネキノコバエ 1~2g/株 生育期株元散布 前日/3回】
- ・ [ベストガード水溶剤](#) 4 A 【チビクロバネキノコバエ 2000倍 前日/3回】
- ・ [モスピラン顆粒水溶剤](#) 4 A 【チバクロバネキノコバエ 2000~4000倍 前日/2回】
- ・ [カスケード乳剤](#) 1 5 【4000倍 前日/3回】
- ・ [ディアナSC](#) 5 【2500倍 前日/2回】
- ・ [ハチハチフロアブル](#) 劇 2 1 A 【1000倍 1番花の開花まで/1回】

注1：同じ農薬名でも、メーカーにより登録内容が異なる場合があるので、使用時には登録を確認してください。

注2：異なる農薬名でも、同一成分を含む場合があるので、成分の総使用回数はラベルで確かめて使用してください。